

## 研究会・地域部会の報告書

提出者：小川 哲平 / 提出日：2024.3.6

研究会・地域部会名	関西地域部会
代表者(所属機関名)	小川 哲平 (三井情報株式会社)
タイトル(イベント名)	第 35 回バイオメディカル研究会 「医療 DX における AI 活用の現状と課題」
日時	2024 年 1 月 23 日 13:30~16:15
場所	グランフロント大阪 (現地開催)
共催団体	公益財団法人都市活力研究所
後援団体	NPO 法人近畿バイオインダストリー振興会議、 NPO 法人バイオグリッドセンター関西
参加人数	登録 34 名
目的： 医療分野における DX を目指し、内閣府に医療 DX 推進本部が設置され、全国医療情報プラットフォームの創設や電子カルテ情報の標準化等、医療 DX 推進のための議論が進められています。第 35 回研究会では、「医療 DX における AI 活用の現状と課題」をテーマに、それらの AI モデルの基盤構築から実際の利活用事例、さらには利活用に際する法的な課題について議論しました。	
概要： 第 35 回研究会では、下記 4 題について、ご講演を頂いた。 詳細なプログラムは以下のリンク参照のこと。 <a href="https://www.urban-ii.or.jp/events/detail.php?event_id=564">https://www.urban-ii.or.jp/events/detail.php?event_id=564</a>	
<演題> 講演 1 「生成 AI が牽引する DX:最新動向とその可能性」 穴井 宏和 先生 (富士通株式会社富士通研究所プリンシパルリサーチディレクター) 講演 2 「SNS を医薬品安全対策の一環として活用するための調査結果について」 平澤 梓司 先生 (独立行政法人医薬品医療機器総合機構医薬品安全対策第二部主任専門員) 講演 3 「リアルワールドデータの拡充に向けた自然言語処理技術の活用について」 杉本 賢人 先生 (大阪大学大学院医学系研究科医療情報学特任助教) 講演 4 「AI 規制立法の最前線:EU の AI 立法の背景と概要」 山田 哲史 先生 (京都大学大学院法学研究科・大学院医学研究科教授)	

成果および感想：

今回は「医療 DX における AI 活用の現状と課題」をテーマに、AI モデルの基盤構築から実際の利活用事例、さらには利活用に際する法的な課題について、4 名の講師からご講演をいただきました。

まず富士通株式会社の穴井先生より、生成 AI の急激な進化と遂げるテクノロジーによって起こったブレークスルーについてその勘所をについてご説明をいただくとともに、さまざまな領域での生成 AI の実践例の紹介を通して、生成 AI が医療・創薬の領域にもたらす変革についてもご紹介をいただきました。そして、2 人目の講演者の平澤先生からは、PMDA での情報入手の情報源として、SNS がどの用に活用できるか、その可能性についてご講演いただきました。3 人目の講演者の杉本先生からは、リアルワールドデータの拡充に向けて、電子カルテの利活用の重要性が高まっている一方で電子カルテ内には多くの臨床情報がフリーテキスト形式で保存されているための情報抽出の難しさ、それを解決するための自然言語処理技術による構造化技術を用いた、画像診断レポートから臨床情報を抽出する研究についてご講演いただきました。最後の京都大学の山田先生からはこれまでの先生のご講演とは毛色のことなる、法律家のお立場から EU における立法の背景にある基本的な考え方やきっかけ、最終的な調整が進む(11 月末現在)AI 規則の内容のあらましについてご講演いただきました。参加者はオンライン開催に比べると少なかつたものの、オンサイト開催ならではの熱量で、最後のディスカッションについても各先生方に様々な質問が飛び交っており、やはりオンライン開催とはことなる現地開催の良さを感じることができました。

終了後のアンケート結果も全て「満足した」「非常に満足した」であり、「AI 技術の現状や EU の AI 立法の背景と概要について知れてよかった」、「大変勉強になった」とのお声を多くいただきました。快くご講演を引き受けて下さった講師の皆様、参加者の皆様とこのプログラムの実現にご尽力いただいた関係者の方々に、心から感謝いたします。講師から講演資料もご提供をいただき、会員に共有させていただく予定です。運営に関して、今回は久々の取り組みとしての完全オンサイト開催、またセミナー終了後の懇親会も開催しましたが、「会場の雰囲気が良かった」と言った声もいただいた一方で、やはりオンラインセミナーに慣れてしまったこともあり集客力では課題があったと感じています。次回以降、再度開催方法含めて検討し、より活発に議論できる場にしていきたいと思えます。